

『光格上皇修学院御幸儀仗図』をめぐる問題

大橋俊雄

[Toshio Ohashi: Notes on “Kohkaku-jyohkoh-syugakuin-gokoh-gijyohzu”]

徳島県立博物館研究報告, 第 28 号, p. 51-61, 2018 別刷

*Reprinted from*

Bulletin of the Tokushima Prefectural Museum, no. 28, p. 51-61, 2018



## 『光格上皇修学院御幸儀仗図』をめぐる問題

大橋俊雄

[Toshio Ohashi: Notes on "Kohkaku-jyohkoh-syugakuin-gokoh-gijyohzu"]

キーワード：光格天皇，御幸，修学院，渡辺広輝，住吉広行，松平定信，故実考証

### はじめに

『光格上皇修学院御幸儀仗図』は、光格上皇が文政7年（1824）9月に、修復された修学院に御幸したさいの行列を描いた絹本着色の3巻の巻物である（以下、これを図巻と略称する。徳島県立博物館蔵。写真1・2）。住吉派で徳島藩の絵師であった渡辺広輝の筆といわれ、藩主家の蜂須賀家に伝来したとされる。昭和47年（1972）に徳島県の有形指定文化財となり、それ以後は上記の名称と主題、筆者、伝来が図巻の説明として定着する。

ところで、現在の主題と筆者は、昭和46年に当時徳島大学教授であった河野太郎氏が調査した成果にもとづく。図巻には標題や題書、奥書などの文字情報がなにもなく、氏はべつの文献をもちいて検討をくわえた。この事実はあまり知られていないので、本稿で具体的ないきさつを紹介する。

また筆者の広輝について、彼が、老中松平定信の主導する故実考証にふかしたしんだ絵師であることを指摘したい。図巻には、御幸の故実を後世にのこすねらいがあったと推定される。

なお「光格天皇」は諡であり諱は兼仁である。「光格上皇」も生前の呼び名でないが、本稿ではそのまま踏襲する。

### 1. 図巻の出現とその後

図巻は、昭和46年（1971）正月に、東京都文京区古書籍商であった反町茂雄氏が、販売目録『弘文荘待賈古書目』第38号（以下、古書目。写真3）にのせたことで世にあらわれた。A4判の古書目の2頁を図巻の解説と写真にあてており、これが近代以後における最初の実見にもとづく記述となった（p.54、参考資料の1）。

古書目によると、当時は主題がわからず『観楓御幸行列図巻』と仮称された。時代は寛政ごろ、蜂須賀侯爵家旧蔵で、筆者名は記されておらず不明とする。内容は「極めて高貴の御方（天皇又は上皇）の行幸の盛儀」で、この御幸が「紅葉に関する慶事」であることが、冒頭に描かれた楓と松によって暗示されるという。上巻はながさ11 m 66cm、見物の町人50名余のほかに296名が列をなし、中巻は14 m 59cmで479名が列をくみ、下巻は7 m 73cmで250名の列になる、と数値をあげて長さを強調する。描写は濃彩緻密で、人物の容貌にそれぞれ個性があり、画面全体に品格があると称賛し、画家はおそらく江戸の人で、凡手でないが高貴をはばかって署名しなかったであろうと推測する。

また湿気でよごれているがていねいに補修され、箱や軸端、巻出しがもとのままでであると指摘する。本稿では補修の問題には立ち回らない。

市場にでた図巻は徳島県鳴門市の個人が入手した。そして県の文化財専門委員であった徳島大学の河野太郎氏が、昭和46年9月に調査をおこなった。このときの調査のコピーが現存する。

調査コピーでは、古書目の解説を受けつぎながら以下のちがいがあつた。図巻は、文政7年（1824）9月に光格上皇が、新装なった修学院にはじめて御幸されたおりの行列を主題とする。渡辺広輝が、藩主の命を受けて文政7年10月から同12年正月のあいだに描き、弟子の守住貫魚に手伝わせた。『東洋絵画叢誌』第1集、『阿波国最近文明史料』、『本朝画家人名辞書』にのる「光格天皇修学院に幸する儀仗図」はこの図巻である。ただし光格天皇は当時すでに退位しているため、名称を一部あらため「光格上皇修学院御幸儀仗図三巻」とする。調査コピーでは、名称について以外は結論のみが記入される。

昭和47年2月には、河野氏が出席して県の文化財専門

委員会がひらかれた。図巻はその会の審議をへて、3月に有形指定文化財(絵画)となった。筆者や法量などのデータは、氏が調書にしるしたとおりである。平成14年(2002)3月には、図巻が鳴門市の所蔵家から県に寄贈された。

## 2. 主題と筆者をめぐる考察

図巻にはB5判の冊子コピー3冊がそなわる。『光格上皇修学院御幸儀仗図三巻について』1冊(以下、冊子Ⅰ。参考資料の2。写真4・5)および『光格上皇修学院御幸儀仗図三巻参考資料』2冊(2冊はおなじ内容。以下、冊子Ⅱ。写真4)である。

冊子Ⅰは手書き原稿のコピーで、さきほどの調書の内容について根拠をていねいに説明する。署名を欠くが、河野氏が原本を執筆したことは、氏の自筆原稿などとの比較からあきらかである。冊子Ⅱは冊子Ⅰで引いた文献のコピーを集め、以下の構成になる(ここでは収録順に番号をふる)。手順としては、冊子Ⅰ・Ⅱの考察をへて調書が作成されたとかんがえられる。

- ①『文政七甲申年九月廿一日修学院御幸御当座和歌』
- ②『系図綜覧』(大正14年刊)所収「詰所系図」のうち太上天皇(第二十代(光格))の条
- ③『守住貫魚集粹画譜』(明治34年刊)所収「守住貫魚先生小伝」
- ④『東洋絵画叢誌』第1集(明治17年刊)所収「守住貫魚伝」
- ⑤『本朝画家人名辞書』(明治30年刊)の「守住貫魚」の項
- ⑥『阿波国最近文明史料』(大正4年刊)の「守住貫魚」「渡辺広輝」の項

河野氏は、③～⑥にある守住貫魚の伝記から主題と筆者を推定した。貫魚は広輝の弟子で、幕府奥絵師の住吉広定に入門して藩絵師になり、明治のなかばまで存命した。明治15・同17年(1882・84)に農商務省が主催した内国絵画共進会で受賞したため、はやくから伝記が公表されていた。それによると、広輝に弟子入りした文政7年(1824)、師から「光格天皇修学院ニ幸スル儀仗三巻」の補写を命じられた。補写とは画面をおぎなうことで、この場合はひろく制作の手伝いと解される。

すでに古書目で、図巻は蜂須賀家旧蔵で天皇または上皇の御幸を描くと説かれる。巻数もおなじである。河野氏が図巻と「光格天皇修学院ニ幸スル儀仗三巻」をむすびつけたのは自然である。

図巻の呼称は、古い順に④⑤が「光格天皇修学院ニ幸スル儀仗三巻」、③が「光格天皇修学院に幸する儀仗図画三巻」、⑥が「光格天皇修学院に幸する儀仗図三巻」である。河野氏もこれらにならったため、儀仗をあらわす「儀仗」の語がそのままのこされた。

図巻の伝来は、蜂須賀家の蔵帳が未公開なため未詳である。しかし反町氏は、古書目で「蜂須賀侯爵家旧蔵」「阿波徳島藩主蜂須賀家旧蔵」とくりかえし、かつて防空壕にあったとする。また同書に「蜂須賀元侯爵家旧蔵」の『松浦宮物語』をのせて写真を表紙につかう(写真6)。この帖は現在東京国立博物館にあり、料紙下絵のある鎌倉時代の写本として重要文化財に指定されている。反町氏は、旧華族が手ばなした貴重書を売買した著名な書籍商である。蜂須賀家と面識があり、図巻と『松浦宮物語』について直接たしかめたのではないかと推測する。

河野氏は、伝来をみとめて制作背景を推測する。御幸の最高の供奉者は関白鷹司政通で、彼の母が当時の藩主斉昌の叔母にあたり、政通の妹が斉昌にとづく。天皇の女御がやはり妹で、斉昌の奥方の妹でもある。こうした関係から記念のために図巻がととのえられたという。

## 3. 図巻と守住貫魚

広輝にくらべると弟子の貫魚には多くの所持品がのこされている。それらのなかには、図巻および修学院御幸にかかわる資料が3件ふくまれる(徳島県立博物館, 2009)。いずれも図巻の補写の記事と関連するので、内容に立ちいって紹介したい。

### ①『仙洞帝修学院御幸卷三之内抜写』1巻

図巻の一部を敷き写した白描模写である(以下、抜写巻)。写された箇所を『御幸御列書 文政六年修学院』と『御幸供奉色目写 文政六年修学院初メテ』(ともに国文学研究資料館蔵阿波国徳島蜂須賀家文書)で照合すると、中巻から御輿の一群、皇太后宮大夫の一行、公卿の一部、上巻から京都所司代の一行の末尾が抜きだされている。上巻の該当箇所はかつて下巻だったが、この問題にはふれない。

抜写巻には打曇紙の表紙がつき、貫魚によるつぎの墨書がある(写真7)。

仙洞帝 文政七年甲申十月  
修学院御幸卷三之内抜写 広輝先生画

「仙洞帝」は光格上皇をさす。「文政七年甲申十月」は

御幸の1ヶ月後で、貫魚の伝記によると補写をはじめた月である。「巻三」は「第3巻」でなく「計3巻」と解され、「広輝先生」は原本の筆者とみなされる。

抜写巻と図巻には、騎馬の飛鳥井左衛門督雅光が描かれる。抜写巻では横顔となり（写真8）、図巻では首をうしろにまわしてこちらをむく（写真9）。反町氏は、図巻の人物の顔にそれぞれ特徴があると指摘するが、顎の上がった雅光の風貌は本人に似せられたのであろう（写真10）。

抜写巻は、おそらく本画からの敷き写しができないので草稿からとられた。この草稿から清写まであいだに、公卿の顔立ちを描きわける作業があった。

鎌倉時代に成立した『古今著聞集』の「画図第十六」には、後鳥羽院が、容貌を写すのに長けた藤原信実に命じて、理想とする御幸行列を3巻の絹絵に描かせたという説話がある（藤原，2001）。図巻は、御幸行列図であること、3巻の絹絵であること、公卿の顔を似せることが説話の内容と符合する。制作にあたり、当時しられていた説話が故実として参照されたとかんがえられる。

#### ②『唐櫃／櫃 笈 箱』1冊

貫魚には色々な調度を写生する習慣があった。この冊子は表紙に「唐櫃」と「櫃 笈 箱」の題箋があり、各丁に箱類の図の切りぬきをはる。なかに図巻の二重箱と巻子の写生がある（写真11～14）。

図巻は反町氏が説くように補修されており、写生の切りぬきは唯一その旧状をつたえる。それらによると、かつては今と異なり巻子の小口に金泥がぬられ、内箱がゆれないように外箱内に杉棧がはめられていた。当初は仕立てがより華美で収納がていねいであった。

#### ③『安政二年新内裏之図』1舗

安政元年（1854）に火災にあい、翌2年に復興された内裏の絵図の写本である。貫魚が写したと推定され、表紙の題箋も彼の筆である（写真15）。

安政度の内裏復興では、障壁画の復旧におおくの絵師が動員され、住吉弘貫（広定から改名）も紫宸殿の賢聖障子と御三間の朝賀図を受けもった。貫魚は、藩主斉裕のゆるしをえて京都に滞在して弘貫を手伝った。この仕事にあたり、新造された内裏の図を写して手もとにおいたと想像される。

絵図では、西の築地にそって地下官人のつかう「執次部屋」がある。その入口の室に御輿が略図され、「文政七申年修学院御幸之時之御車長柄此所ニ而拜見」と注される（写真16）。図巻に登場する御輿が当時そこに保管

され、貫魚本人が見たと解される。実物をまえに補写を憶いおこしながら記録したのであろう。

## 4. 渡辺広輝の略歴

図巻の筆者とされる広輝の略歴をしめしたい。

彼は安永7年（1778）に阿波国阿波郡で生まれた。藩主治昭のときに推薦をえて江戸に出、寛政8年（1796）に奥絵師の住吉内記広行に入門した。享和2年（1802）に3人扶持7石で召され、文化6年（1809）に土佐流御絵師となった。つぎの斉昌の代にも御用をつとめ、同14年（1817）に5人扶持10石に増加され、文政2年（1819）に家の成立書を藩に提出した。

画作では、文化元年（1804）叙の『輿車図考』に挿絵を描いた。同書は、中世以前の輿や牛車をめぐる考証で、寛政の改革で知られる元老中松平定信の編纂である。文献と古画を渉猟して、近世以前における乗りもの研究の指標と評価される（佐多，2008）。もとは16巻で挿絵が50余といわれる。

定信の叙文によると、考証は稲村行教や橋本経亮、屋代弘賢などの助力を得、挿絵は下記のとおり広輝に描かせた。

画は渡辺広輝に予（定信：稿者注）みづからさし教へてかゝしむ

原画は管見にふれないが、翻刻や副本とされる零本から、古画にもとづく着色画であったと推定される。広輝と考証とのかかわりは次章でとりあげる。

今にのこる作品では、歌人で国学者でもある加藤千蔭のすがたを描いた『加藤千蔭像』（東京国立博物館蔵）が知られる。絹本着色で、文化4年（1807）の千蔭の賛があり、箱書などから長谷川貞忠と広輝の合作とされる。貞忠は絵師でなく、藩の江戸上屋敷を普請した作事奉行で、千蔭の容貌を知っていて制作をたすけたと推測される（松原，1998）。肖像画において顔を似せる手法であり、図巻の制作でも公家のがわに協力者がいたのであろう。

広輝が没したのは天保9年（1838）である。現在の東京都港区三田4丁目の長延寺に墓がたてられた。

## 5. 広輝と故実考証の環境

広輝を住吉家に入門させたのは藩主治昭である。彼は儒学者の柴野栗山や和学者の屋代弘賢と交流し、定信の親戚にあたり、蔵書が阿波国文庫として知られた。治昭

をめぐる人びとをとおして、広輝と故実考証とのかかわりをとらえたい。

京の内裏は、天明8年(1788)に焼けて寛政2年(1790)に上棟する。老中首座の定信が再興の責任者となり、光格天皇の意にそって復古様式がとられた。紫宸殿には、これまでのとおり中国の功臣鴻儒をあらわす賢聖障子がしつらえられた。幕府儒官の栗山が復古にあわせて図様を考証しなおし、広行が寛政4年(1792)に描きあげた(鎌田, 2009)。

障子ができた年、定信は山城・大和の寺社宝物の調査をおこなう。広行が絵、弘賢が書を受けもち、古刹をたずねて拓本と模写をとった。栗山と広行がその内容を『寺社宝物展覧目録』にまとめて呈上した。収録したのは本朝の故実の考拠となる品々である(小林, 2000)。

定信は好古の士であった。絵巻の模写や補作を手がけ、各地に家臣をつかわして古物を写させた。寛政7年(1795)自序の『古画類聚』37巻、同12年(1800)儒臣広瀬典序の『集古十種』85冊はその成果で、古画や古物を写して故実のたよりとする意図がしめされる(東京国立博物館, 1990)。なお、寛政8年(1796)には定信の嫡子が治昭の息女綱と縁組をする。この嫡子のはちの桑名藩主松平定永である。

栗山は、20年以上阿波藩儒をつとめて定信に見出された。蜂須賀家との交流は終生つづき、没後には蔵書が治昭にゆずられた。弘賢は、能書で知られる幕府御家人である。塙保己一に学び、栗山に引きたてられて和学者として大成し、種々の編纂事業にたずさわった。弘賢も蜂須賀家としたしく、藩主のために揮毫し、蔵書である不忍文庫はのちに阿波国文庫におさめられた。

治昭の奥小性に森川宗次がいる。彼は古墨跡法帖にくわしく、治昭から筆硯のことをまかされた。宝物調査には、御内御用の名目で参加して褒美をあたえられた。没後は国もとに遺墨墳がいとなまれ、栗山がえらび弘賢が書いた銘文が石碑にきざまれた(竹治, 1995)。定信の故実考証のうち、知識とその体系は栗山と弘賢、書の部分は宗次、画は広輝を介して治昭にもたらされた。

広輝は広行から住吉の画法と故実考証をまなんだ。また定信から直接に考証の手ほどきをうけた。その背景には、定信が主導する故実考証のながれを吸収しようとする藩主家のつよい意向があった。

## むすび

図巻は河野太郎氏が説くように、光格上皇による文政7年(1824)の修学院御幸を主題とし、渡辺広輝が筆を

とり、大名の蜂須賀家に伝来した。鷹司家との姻戚関係が制作の背景にあったとされる。

さらに考察をすすめると、故実考証をめぐる松平定信と藩主家、広輝とのかかわりから、図巻はのちの時代のひとが考証につかうことを想定して描かれたと推測される。中世の説話をふまえた体裁なども、よりふるい故実を引きついで、考拠としての正統性を主張したものであろう。

## 参考資料

### 1『弘文荘待賈古書目』第38号(写真3)

弘文荘反町茂雄氏による、古書展覧目録(1971年1月)の解説文。図巻をはじめて世に紹介した文章で、いくつかの重要な指摘がなされる。

121 観楓御幸行列図巻 寛政頃 極密極精写  
蜂須賀侯爵家旧蔵  
三巻

絹本極彩色。タテ三九、五糎、長さ上巻一一米六六糎、中巻一四米五九糎、下巻七米七三糎。長大の、絢爛豪華の行列図巻である。題名も筆者名もしるされていない。内容に従って仮りに右の如く題する。

上巻は、遠く二つの山を見はるかす景からはじまる。一の山には大きな松樹七本が生え、上に名も知れぬ三羽の鳥がとぶ。他の二山は、満山の緑色の内を、三四分がた紅葉したもみぢ葉が色映えて見られる。次に紋服と上下に威儀を正した町の重立ちらしい人物三人が、箒を手にして道路を清掃して居る図。つづいて画面は上下に分かれ、上半には、前部を低い垣で仕切って、多くの庶民が青筵の上に正座して居る。前方の人たちは黒の定紋付に上下、後方のは紋付羽織、色とりどりに美しい衣裳の婦人子供が間を点綴し、すべて五十人ほど、みな謹直な姿勢で待ちかまえて居る。明らかに、極めて高貴の御方(天皇又は上皇)の行幸の盛儀を拝観しようとする人々である。下半分には、変わらぬ色葉の青松と真紅に燃える紅葉二もとが、横拡がりにユツタリと描かれてあって、この御幸が、紅葉に関する慶事である事を暗示する如くである。

さて、長い長いきらびやかな行列が、金棒を手にした中年の二人の先ぶれを先頭に進んで来る。歩列の人の数は、上巻に二百九十六、中巻に四百七十九、下巻に二百五十、合せて千二十七人。一人ずつが、身長約十一センチほどに大きく描かれ、極密極彩色、目ざむるばかりである。荷かつぎ・馬の口とり等の下人の外は、みな紋服の上に上下をつけ、所々に騎乗の公卿・

殿上人の姿が交り、馬も派手やかに装われてある。騎馬の貴人の数は、上巻に五騎、中巻に十騎、下巻は十二騎。中巻は最も長巻で、収載の人数も多いが、その半ばすぎに、十五人の仕丁にかかれた玉輦が進み、若干の人数をへだてた後方に、四人の口取りに馬を引かせた閑白らしい人物が従い、その後七人かきの女輿がつづく。女院の御輿であろうか。下巻は供奉の人々の列だけ、騎乗の上官たちも、中巻のよりはやゝ下るきわの人であるかに見える。謹厳華麗な行列は、かくて三十メートル以上もつづく。

精細緻密な写生で、千を超える貴賤の人物の容貌には、それぞれ個性が見られ、極濃彩を施しながら、画面に品格があって、画家の凡手ならざるを証する。署名のないのは、高貴を憚っての所為であろう。画風から推して、多分江戸の画人の手になるものであろう。惜むらくは、戦時中に防空壕の裡で湿気に侵されて、紙面がかなり汚れたが、今は丁寧に補修を加えてある。

装潢にも善美をつくしてある。巻軸には楓の葉型の螺鈿の象が金を施し、巻出しは、表は大きく紅葉を織り出した高雅な緞子、見返しは、絹地の上に豊かに金粉を散らし、金泥で横雲を引き、その間に細い枝についた紅葉が描かれてある。

もとの二重箱入。内箱は黒の極上の漆塗地に、こゝにも大きく紅葉の金蒔絵を厚々と盛り上げ、箱紐の金具は、もみぢ葉形の鍍金の大ぶりの金具である。阿波徳島藩主蜂須賀家旧蔵。

## 2『光格上皇修学院御幸儀仗図三巻について』(写真4・5)

図巻の主題と筆者を推定した論考。手書きコピーの冊子で、署名、日付、奥書などを欠き刊行された形跡もない。本文でのべたとおり昭和46年(1971)に河野太郎氏が著したと推定される。

### 光格上皇修学院御幸儀仗図三巻について

この作品は「蜂須賀家旧蔵観楓御幸行列図巻」と称されていたものであるが正式には表題のように称すべきものである。上、中、下の三巻からなり各巻上下三十九・五センチ長さ合わせて約三十四メートル絹本着色、極細密描写の労作である。

作者は阿波藩の絵師渡辺広輝(一七七八一—一八三八)で非常な労作であるため彼の門弟守住貫魚(一八〇九—一八九二)を助手として補写を命じて完成したものである。

光格天皇(一七七一一—一八四〇)は文化十四年(一八一七)三月に譲位されて上皇となり、仙洞

御所に遷御された。幕府は上皇のために文政五年(一八二二)修学院の復旧に着手、文政七年お茶屋の修理と寿月観、隣雲亭の復旧を完成、京都所司代内藤信敦は千歳橋を建造、献納した。修学院は平安時代に佐伯公行が叡山の僧勝算のために寺院を建立した地で修学院の地名はその寺院名に由来している。その後徳川家綱が後水尾上皇のために造営して山荘としたものであるが荒廃していた。光格上皇は文政七年(一八二四)九月二十一日新装の修学院に初めて御幸された。その目的は観楓が主であった。(系図綜覧上巻、詰所系図五十六頁、第二百十代(光格)太上天皇の経歴の中に「同(文政)七年九月廿一日始御幸于修学院」とある。また香川大学図書館神原文庫、「文政七甲申九月廿一日修学院御幸御当座和歌」という写本により光格上皇の初座の修学院御幸の年月日を知ることができると共に公卿の各人が紅葉の美を詠じた歌集であるため供奉の一行の氏名を知ることができる。)

守住貫魚の伝記の記録は多いが文政七年十月、師の命により光格天皇修学院に幸する儀仗図三巻を補写、広輝その技の優れたのに驚き輝の一字を与えたということがあるが貫魚が広輝より輝の字を授けられたのは文政十二年正月十一日であるからこの作品は文政七年十月着手、文政十二年の初めに完成したものと考えられる。

渡辺広輝は安永七年(一七七八)十月阿波郡香美で生まれたが、家は代々勝浦郡本庄村に住み、父は医師であった。藩の絵師矢野栄教の推せんで江戸で絵を学ぶことになり、寛政七年、十八歳のとき江戸へ出発、寛政八年一月住吉広行に入門した。文化六年八月正式に土佐流御絵師となった。主として江戸に住んだが、折々阿波にも帰っている。住吉派の伝統を守り、精密な描写の美しい作品が多い。天保九年三月十七日江戸で没した。六十一歳。

守住貫魚は文化六年(一八〇九)七月徳島で生まれた。彼の父は藩の鉄砲方であった。十六歳のとき渡辺広輝に入門、天保五年(一八三四)広輝の紹介で住吉広定に入門した。天保九年十一月正式に藩の絵師となった。長命であったため明治時代にも住吉派の巨匠として活躍し明治二十三年には帝室技芸員となった。明治二十五年(一八九二)二月二十六日大阪で没した。八十四歳。

この作品の内容について、上巻は長さ十一メートル六十六センチ、三つの山の景が最初にあるがこれは修学院の近くにある松が崎山と横山を左右に描きその間に遠く比叡の山を入れてあるものと考えられる。次いで拝観の町人たちの正座している姿が五十人程描かれ

ているが、婦人、子供等の衣装が美しい。行列の人数は上巻に二百九十八人描かれているが、これは先導をした京都所司代内藤紀伊守信敦の一行と、仙洞附成瀬因幡守正育の一行である。内藤の家紋は下り藤と軍配団扇であるがこれらの紋と共に槍二本の形によっても決定することができる。成瀬の家紋はかたばみと丸に一文字であるがこれもこの巻にはっきり描かれている。

【図】 【図】 【図】

(内藤の紋と槍、武鑑より) (成瀬の紋)

中巻は十四メートル五十四センチで最も長い。この中心をなすものは上皇の玉輦であるが、四百七十九人の人々が描かれている。「光格天皇修学院御幸御当座和歌」によれば、三十八人の公卿がお供したことがわかるが、これら供奉の公卿の一行はこの巻に多く描かれている。

最高の供奉は関白鷹司政通であるが上皇の御子有栖川韶仁親王も中務卿としてお供している。全部の公卿たちをこの絵の中で確認することはむづかしいが次の家紋によって推定できるものが多い。

牡丹(鷹司) 鶴丸(日野, 日野西, 広橋, 裏松, 七条)

【図】 【図】

かたばみ(藤谷, 冷泉) 木瓜(徳大寺) 剣菱(葉室)

【図】 【図】 【図】

竜胆(六條, 庭田, 高倉, 大原, 綾小路, 東久世)

【図】

下り藤(二条, 一条) 杜若(花山院)

【図】 【図】

花勝見(櫛笥) 連翹(正親町, 三条)

【図】 【図】

杏葉車(高野) 唐花(高松) 連銭(安部)

【図】 【図】 【図】

十六銀杏(飛鳥井) 三引両(北小路)

【図】 【図】

下巻は七メートル七十三センチで二百五十人の人が描かれている。お供の公卿たちの姿もこの巻にあるが、

仙洞附の小笠原豊前守直信の一行の姿が描かれている。小笠原の家紋は【図】三階菱であるが更に丸に小の字の紋を下人がつけていることによって確認することができる。

供奉の公卿たちの氏名については別紙「光格天皇修学院御幸御当座和歌」によって知ることができるのでここには詳記しないこととする。

蜂須賀家がこの図を描かせた理由は時の藩主斉昌の夫人は関白政通の妹、政通の母は蜂須賀重喜の娘、即ち斉昌の叔母にあたるというような近い親戚であること。時の天皇の女御は政通の妹であると同時に蜂須賀斉昌夫人の妹にあたり、皇室とも深い関係にあることから記念のために残したものであろう。この図巻は記録的に存在していたが所在が不明であったものである。

(原文では【図】にそれぞれ家紋などが図示される: 稿者注)

## 引用文献

- 藤原重雄. 2001. 行列図について－歯簿図・行列指図図・絵巻－. 古文書研究. 53: 45-61.
- 鎌田純子. 2009. 賢聖障子の研究－寛政度を中心に－. 尾陽－徳川美術館論考. 5: 47-65.
- 小林めぐみ. 2000. 『集古十種』の編纂－その目的と情報収集. 福島県立博物館編. あるく・うつす・あつめる 松平定信の古文化財調査 集古十種. p. 100-111. 福島県立博物館. 福島.
- 松原 茂. 1998. 画家・文人たちの肖像. 日本の美術, 386: 98p.
- 佐多芳彦. 2008. 服制と儀式の有職故実. 372p. 吉川弘文館. 東京.
- 竹治貞夫. 1995. 阿波碑文補集. 457p. 私家版. 徳島.
- 徳島県立博物館. 2009. 生誕二百年 守住貫魚－御絵師・好古家・帝室技芸員－. 103p. 徳島県立博物館. 徳島.
- 東京国立博物館. 1990. 松平定信 古画類聚 本文篇 126p. 図版篇 185p. 毎日新聞社. 東京.





写真1 『光格上皇修学院御幸儀仗図』中巻 御輿の部分 当館蔵



写真2 『光格上皇修学院御幸儀仗図』中巻 関白鷹司政通の部分



写真3 『弘文荘待買古書目』第38号のうち『観楓御幸行列図巻』解説 徳島県立図書館蔵

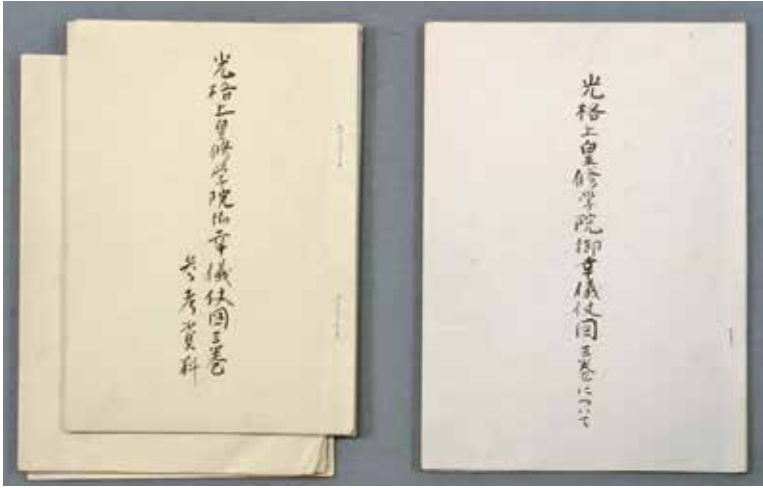


写真4 『光格上皇修学院御幸儀仗図三巻について』(右)と『光格上皇修学院御幸儀仗図三巻/参考資料』(左) 当館蔵



写真5 『光格上皇修学院御幸儀仗図三巻について』本文



写真6 『弘文荘待賈古書目』第38号表紙



写真7 『仙洞帝修学院御幸儀仗三之内抜写』表紙 当館蔵



写真10 『光格上皇修学院御幸儀仗図』中巻のうち雅光の顔



写真8 『仙洞帝修学院御幸儀仗三之内抜写』のうち飛鳥井雅光



写真9 『光格上皇修学院御幸儀仗図』中巻のうち飛鳥井雅光



写真 11 - 2 『光格上皇修学院御幸儀仗図』の黒漆塗内箱 当館蔵



写真 11 - 3 黒漆塗内箱の紅葉綵平打紐

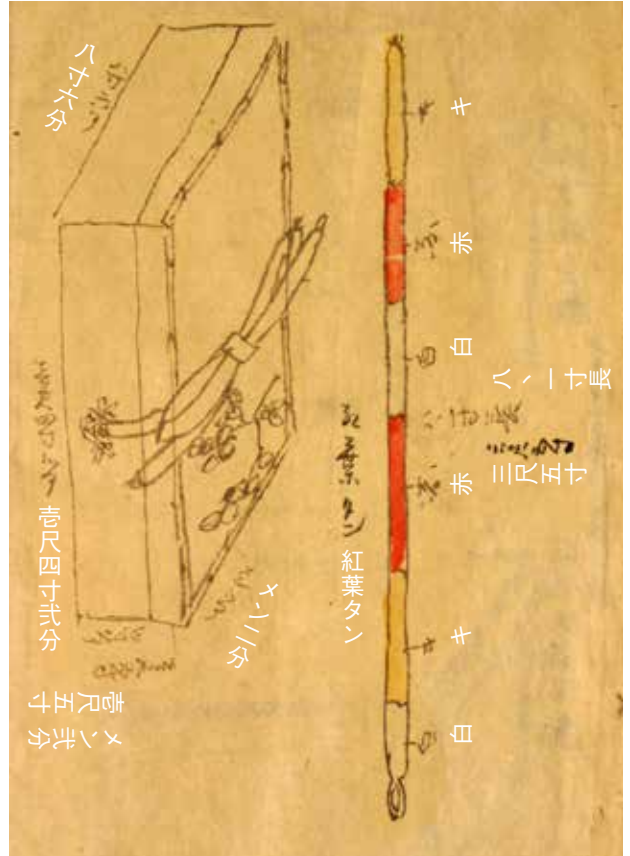


写真 11 - 1 『唐櫃／櫃 笈 箱』より 黒漆塗内箱図および紅葉綵平打紐図 当館蔵



写真 12 - 2 黒漆塗内箱 ふた表



写真 12 - 1 『唐櫃／櫃 笈 箱』より 黒漆塗内箱のふたの楓金蒔絵図



写真 13 - 1 『唐櫃／櫃 笈 箱』より 黒漆塗内箱の紐金具・卷子全体・表紙ぎれの紅葉文様図



写真 13 - 2 黒漆塗内箱の紐金具



写真 13 - 3 下巻の卷子全体

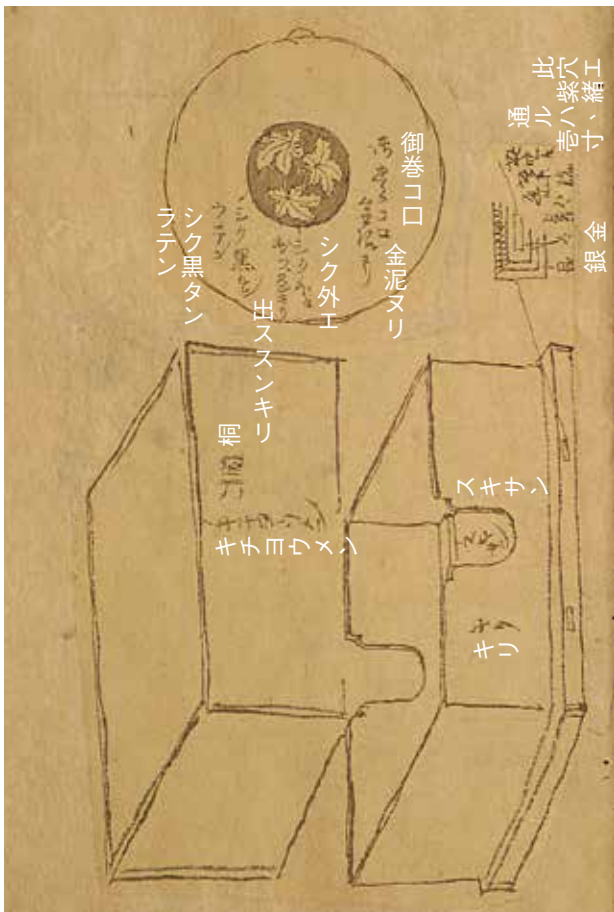


写真 14 - 2 上巻の小口部



写真 14 - 5 桐製外箱の紐とおし孔金具

写真 14 - 1 『唐櫃／櫃 笈 箱』より 卷子の小口・桐製外箱のふたと身・外箱の紐とおし孔の金具図



写真 14 - 3 『光格上皇修学院御幸儀仗図』の桐製外箱 当館蔵



写真 14 - 4 桐製外箱の身



写真 15 『安政二年新内裏之図』表紙 当館蔵

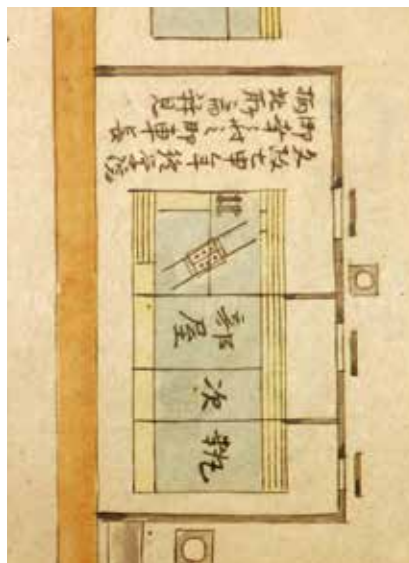


写真 16 『安政二年新内裏之図』部分





